

『人間を大事に』する防災教育の推進

平成 25 年度 高知県実践的防災教育推進事業 拠点校 黒潮町立佐賀中学校

I 学校における背景、問題意識

“最大震度 7、最大津波高 34.4m の黒潮町・・・”と、平成 24 年 3 月に内閣府から発表された推計値は衝撃的なものだった。その後、黒潮町では「第 2 次南海地震・津波防災計画の基本的な考え方」を示し、「あきらめない。揺れたら逃げる。より早く、より安全なところへ。」をスローガンとして挙げている。「自分の命は、自分で守る」の自助の精神と、地域の人とともに助け合う共助の精神を大事にして、「あきらめる」ことから何も生まれないという考え方から「避難放棄者」を出さず犠牲者ゼロを目指しており、本校でも防災教育に取り組むことは急務となっている。

そこで本校では、平成 25 年度は高知県実践的防災教育推進事業の指定を受け、生徒が主体的に行動し、正しく判断を行い、自分の命は自分で守ることのできる力をつけるために『人間を大事にする』防災教育の推進を研究テーマとして、防災教育に取り組んできた。また、保育所や小学校が隣接していることもあり、連携した取組を行うことにも考慮した。

II 取組のポイント

- ◆有識者から専門的な知見をいただく授業と講演
- ◆佐賀地域の特性に応じた系統的な防災教育全体計画・年間指導計画の作成と防災学習の授業研究
- ◆様々な場面を想定した避難訓練の実施
- ◆保小中との連携

III 取組の概要

1 佐賀中の防災教育の目標

『人間を大事に』する防災教育の推進

- ・避難訓練等を通して、生徒が自主的に行動し、正しく状況判断ができる力を養う。

- ・災害の自然的・社会的要因をつかみ、災害への備えについて考える。
- ・災害から生命を守るのに必要な能力や資質の向上を図る。
- ・人間としてのあり方、生き方を考え、生命を尊重する心を育成するとともに、他者に対する思いやりや助け合いの心を育てる。

2 取組内容

(1) 有識者から専門的な知見をいただく授業と講演

高知県学校防災アドバイザー派遣事業や黒潮町の取組などから、以下の 4 名の有識者から講演や防災の授業をしていただくことができた。

①大村誠氏(高知県立大学教授)による避難訓練の講評及び講演

第 1 回保小中合同避難訓練において、避難経路や避難行動の様子を見ていただく。避難途中の倒壊物などの危険性や保育園児へのサポート等について助言をいただいた。訓練後は『南海地震について』という演題で、地域の実情に沿った災害や避難行動についてお話いただいた。



②大木聖子氏(慶應義塾大学准教授)による公開授業及び講演

地震のメカニズムや地震から命を守るための行動の仕方について教えていただいた。

③片田敏孝氏(群馬大学教授)による講演

釜石の事例から防災教育の重要性や中学生の役割を生徒に教授していただいた。

④矢守克也氏(京都大学教授)による講演

学校と地域の連携の大切さや津波でんでんこの真の意味等をご示唆いただいた。

(2) 佐賀地域の特性に応じた系統的な防災教育全体計画・年間指導計画の作成と防災学習の授業研究

①防災教育全体計画

黒潮町立佐賀中学校 防災教育 推進計画

生徒の実態

- ・素直で真面目な生徒が多く、指示されたことについては、しっかりと行うことができる。しかし、指示待ちの傾向が強く、自主性や判断力を身につける必要がある。
- ・防災についての知識はあるが、訓練等には前向きに取り組むことができない。

学校教育目標
『人間を大事に』

地域の実態

- ・34.4mの津波が予想されている。避難道の整備は急ピッチで行われているが、避難所がなく、災害に対する備えは行われていない。
- ・高齢者が多く、避難の困難な状況の人もいる。
- ・年間数回の地域住民による避難訓練や防災についての話し合いを積極的に行っている。
- ・保育所・小学校が隣接しており、合同での避難訓練や避難の方法等を考え、協力して取り組もうとしている。

防災教育の目標
『人間を大事に』する防災教育の推進

- ・避難訓練等を通して、生徒が自主的に行動し、正しく状況判断ができる力を養う。
- ・災害の自然的・社会的要因をつかみ、災害への備えについて考える。
- ・災害から生命を守るのに必要な能力や資質の向上を図る。
- ・人間としてのあり方、生き方を考え、生命を尊重する心を育成するとともに、他者に対する思いやりや助け合いの心を育てる。

防 災 教 育 推 進 の 視 点

防災体制の整備充実	防災教育の推進	指導力・実践力の向上
<ul style="list-style-type: none"> ・教職員の役割の明確化と家庭や地域及び関係機関との連携 ・災害時の危機管理能力の向上 ・日常の安全管理と避難経路の点検 	<ul style="list-style-type: none"> ・教育活動全体を通じた防災教育の推進 ・防災教育副読本やDVDの活用 ・効果的な防災訓練の実施 	<ul style="list-style-type: none"> ・教職員の防災リテラシーや応急処置能力の向上 ・心のケア等の校内研修会の充実 ・防災教育の指導方法・指導内容の工夫

各 学 年 の 目 標

第 1 学 年	第 2 学 年	第 3 学 年
<p>テーマ：「命を守るために 私たちができることは」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・人間としてかけがえのない生命を与えられていることに喜びと感謝の気持ちを持ち、人間としてどう生きていくかを考える。 ・家庭や地域社会の一員として共に力を合わせて集団生活の向上に努めようとする態度を育てる。 ・自然災害について知るとともに、地域の状況をとらえることによって、災害の備えについて考え、防災意識の向上を図る。 	<p>テーマ：「災害に備える 地域を見つめて」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・被災後の生活について考え、被災児童・生徒の心情や悲しみ、苦しみの深さにふれ、生命の尊さについて考える。 ・ボランティア精神及び勤労の喜びを理解し、ボランティア等の活動に積極的にかかわろうとする態度を養う。 ・地域の災害特性に気づかせるとともに、先人の被害への備えを調べ、地域における防災体制を考える。 	<p>テーマ：「災害に強いまちづくり 佐賀」</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やさしさや思いやりの心を持ちながら、生きていくことの大切さを理解させるとともに、進んでみんなのために尽くそうとする態度を養う。 ・地震のメカニズムを理解し、安全で快適な町づくりをするために必要な環境整備について関心を持つ。 ・災害時における学校が果たす役割について理解し、学校と地域の人々とのつながりについて考える。
<ul style="list-style-type: none"> ・災害時に周囲の状況を的確に判断し、安全に避難する能力を身につける。 ・災害時の応急処置について、その意義と処置法を身につける。 		

教 科

- ・科学的思考力・判断力の育成
- ・災害のメカニズム、地域の特性、防災体制の理解
- ・防災意識の高揚
- ・ボランティア精神の育成
- ・応急処置法の体得

道 徳

- ・生命の尊重、差別意識の完全解消、異文化理解、共生等人権尊重の精神に徹する態度の育成
- ・ボランティア精神及びやさしさや思いやりの心の育成
- ・仲間づくり

特別活動

- ・日常的な備え、災害時の安全確保、的確な判断や行動等実践的能力の育成
- ・互いに助け合い、自ら困難を克服する態度や実践的能力の育成
- ・仲間づくり
- ・自主性やボランティア精神の育成

総合的な学習の時間

- ・ボランティア精神及び実践的態様の育成
- ・今後の防災体制について考える態度の育成
- ・防災意識の高揚

②第1学年の取組

【テーマ】「命を守るために私たちにできることは」

【防災学習の例】

『津波から命を守る』（特別活動）

1学期は、「津波からの避難に際し、適切な判断・対処法を考える」というめあてで、東日本大震災時に高知県にも津波警報が出されたにも関わらず、実際に避難した人が5.9%にすぎなかった事実をもとに、なぜ避難しなかったのか考えさせた。その後、津波の特徴を確認し、津波から命を守るためにどう行動すべきかについて話し合わせ、「地震の揺れがおさまったら、できるだけ早く、できるだけ高い所へ避難する」ことの重要性を確認した。

そのうえで、「クロスロード」の問題を活用し、逃げたくても逃げられない状況でどう判断し、どう行動するかを考えさせた。最後に、「釜石の奇跡」の映像を紹介し、津波に対してはとにかく「率先避難」が何よりも大切であることを確認した。

2学期には、1学期の学習を受けて、佐賀地区・白浜地区・藤縄地区の津波の際の避難場所を地図を使って確認し、学校以外の場所にいる時に地震が来たら、一番近い避難場所はどこなのか、避難経路はどうなっているのかを、グループ毎に話し合わせ、報告し合った。

3学期は、実際の避難場所の状態や地震による避難経路の危険性を把握するという課題をもとにフィールドワークをし、自分たちの目で避難経路や避難場所を確認して問題点や改善策について考えていった。

生徒たちの防災に対する意識は以前よりも高まり、「率先避難」や「津波でんでんこ」のもつ意味も知り、大津波からの避難を身近なこととして捉えられるようになってきていると思われる。

③第2学年の取組

【テーマ】「災害に備える 地域を見つめて」

【防災学習の例】

『備えて安心』（特別活動）

高知県教育委員会が作成した『高知県安全教育プログラム』に基づき、研究授業を実施した。いざという時の非常持ち出し袋を持ち寄り、中身を交流した。少数意見の中でも「これは必要だ」と改めて確認できるものもあり、全員で考える場がもてた。災害の備えの大切さや、防災について真剣に考えることができた。特別活動の授業では、「自分はこういう対策をする」等の自己決定をする場面が必要である。被災後の生活について考え、ボランティアなどの活動に積極的にいかかわろうとする態度も育てていきたい。



【授業の様子】

④第3学年の取組

【テーマ】「災害に強いまちづくり 佐賀」

【防災学習の例】

『災害に強いまちづくり 佐賀』（総合的な学習の時間）

生徒それぞれが下記のような課題を設定し、課題解決学習を展開した。

- 「昭和の南海地震」についての聞き取り
- 避難路の危険箇所や避難方法の検証
- 一次避難所から二次避難所までの避難道の確認
- 救出活動機材など、消防署への聞き取り

調べ学習後、収集資料を整理分析し、グループ毎に発表した。研究発表会では、災害時に自分たちの果たす役割や黒潮町として必要な災害対策上の提言を行った。



【昭和南海地震の聞き取り】 【消防署への聞き取り】

年度当初「地震が来たらどうせ佐賀地区はだめ」という消極的発想を持つ生徒が多くいたが、震災学習を通して、率先避難者になることはもちろん、避難生活の際には主体的に行動する存在であろうという意識の高まりが見られるようになった。



(3) 様々な場面を想定した避難訓練の実施

<第1回> 4/11 (木) 校外活動中 (歓迎遠足終了後)

- ・塩やの浜から東公園へ避難

※小雨により、訓練から避難経路を確認しながら帰校

★塩やの浜からの避難は初めてで、避難道と避難場所の確認を全員ができた。

<第2回> 5/7 (火) 授業中

- ・各教室から東公園へ避難

★校長、防災主任が不在であったが、指揮する者が不在の場合の訓練と位置付け、役割分担の変更にも教職員が即座に順応し避難誘導や点呼等をスムーズに行うことができたのは、とてもよかった。

★早く到着した生徒と遅い生徒の間に4分位の差があり、この時間の差を今後の訓練で縮めていくことが大事になる。

★避難道は整備されているが、少し坂がきつい。高齢者の避難の際に、中学生に何ができるのかを考えておく必要がある。

<第3回> 6/12 (水) 朝学活中

- ・各教室から東公園へ避難

★ケガ人の訓練への参加の仕方を考える。足をケガしている場合には、時間がかかるので、その生徒への対応を考えなければならない。

★ヘルメットの設置場所について考える。

<第4回> 7/5 (金) 休み時間中

☆第1回保小中合同避難訓練

- ・校舎内から東公園へ避難
- ・Jアラート活用



【園児をおぶったり抱いたりしながら避難する保育士】

★避難については、冷静に判断できていた。ただ、日頃の学びがないと続かない。避難訓練のめあてを明確にして学びを深め、訓練に意欲的に取り組むよう工夫をすることが大切である。

★避難経路の倒壊物の問題がある。次回からは、道の中央を通り避難する必要がある。

★保育士の指示に従うシミュレーションも経験し、中学生が園児の支援を考慮しておくことも必要になる。

★今後も、保小中のつながりの強さを活かしていろいろな取組を考え、積極的に行っていくことが大事である。

<第5回> 9/1 (日) 8:00～ (在宅中及び部活動中)

☆防災の日 地域避難訓練に参加

- ・各家庭及び部活動場所から各地区避難場所へ避難

※荒天により中止

<第6回> 10/18 (金) 昼休み中

☆第2回保小中合同避難訓練(次頁参照)

- ・校舎内から東公園へ避難
- ・Jアラート活用
- ・中3選抜生徒が保育園児へサポート

<第7回> 11/19 (火) 昼休み中

- ・集合時の点呼の仕方 (学級委員→担任→防災主任) に重点を置いた訓練

★今回は、スムーズな点呼(人数確認)に重点をおいて行ったが、1年生の男子が戸惑い、時間がかかった。2年生の男子も早退者がいたことに気付かず、人数確認で混乱してしまった。3年生については、休んでいる生徒もしっかり把握し、スムーズな確認が行えた。

<第8回> 1/20 (月) 部活動中

- ・各部活動場所から東公園へ避難

第2回 保小中合同避難訓練実施要項 (一部抜粋)

1. 避難訓練の趣旨

保小中合同避難訓練は本年度7月に1度実施し、高知県立大学の太田誠教授から、保育園児へのサポートと、避難途中の倒壊物などの課題を投げかけられている。今回の訓練では、中学3年生で選抜された生徒が保育園児の避難の手助けを行うことを考えた。このような訓練を重ねる中で、避難経路や避難の際の問題点を考え、改善点を検討することで全員が無事避難できるようにし、すべての子どもたちの命を守ることを目的とした。

2. 訓練の内容

- ①『津波でんでんこ』の考え方をもとに、3年生の選抜された生徒以外は、避難場所の東公園へ迅速に移動する。移動場所到着後、点呼を行う。【迅速な避難】
- ② 共助の考え方をもとに避難が困難な人へのサポートを中学2・3年生の生徒が行う。【保育園児へのサポート】
- ③ 子どもたちの尊い命を守るという考え方をもとに、実践的な避難訓練として合同避難訓練を行う。
【保・小・中合同避難訓練】

3. 訓練のシナリオ

2013年10月18日(金)13:20、四国沖を震源とするマグニチュード9.0の南海トラフ巨大地震が発生した。高知県では、地震は2分間続き、その後、巨大津波が押し寄せてきた。第1波は地震発生から3分後に室戸市へ、5分後には土佐清水市を襲い、その後、各市町に押し寄せた。そして、黒潮町では24mの津波が襲ってきた。

保育士・教員の指示に従い、机等の下で身を守ったり、身を守る物がない場合は、倒壊物のない場所を選び、ダンゴ虫のポーズで頭部を守ったりしながら、揺れが収まるのを待つ。

地震の揺れが収まると同時に、園児・児童・生徒は、保育士・教員の指示のもと、避難経路を通って東公園へ迅速な避難を開始する。中学3年生で選抜された生徒については、佐賀中学校正面玄関で園児を待ちサポートを行う。その際、生徒は保育士の指示に従い、バギーを押したり、おんぶしたり、手を引いたりしながら、園児と一緒に避難を行う。

【保育園児へのサポート】

- ① 0歳～…避難はバギーに乗せて保育士。3年生2名補助。
- ② 1歳～…避難はバギーに乗せて保育士。3年生2名補助。
- ③ 2歳～…避難は徒歩。3年生2名補助、声かけ。
- ④ 3歳～…避難は徒歩。3年生2名声かけ。
*残りの中学3年生と中学2年生は、第1避難場所から園児の手を引いて避難する。
- ⑤ 4歳～…避難は徒歩。3年生2名声かけ。小学6年生はオクラ忠魂墓地から園児の手を引いて避難する。
- ⑥ 5歳～…避難は徒歩。3年生2名声かけ。残りの小学6年生は、オクラ忠魂墓地から園児の手を引いて避難する。

【留意点】

今回の避難訓練では、選抜された中学3年生によるサポートが設定されている。しかし、巨大地震発生という有事の際には、各自の率先避難が最優先であり、このような設定での避難とはならないことを押さえておきたい。

あくまで避難の際、園児への援助をテーマにおいた避難訓練をする中で、「共助」の気持ちを持ち互いに励まし支え合いながら安全に避難する心と体の育成を考えての設定である。



(4) 保小中との連携

佐賀地区における防災意識や地域防災力を高めるためにも、隣接している保育所や小学校と連携しながら、次のような防災教育の取組を行った。

【5月1日(水)】高知県実践的防災教育推進事業小中合同計画書見直し・打合せ

【5月30日(木)】第1回学校評議員会

【6月20日(木)】佐賀小学校防災教育講演会に参加

【7月5日(金)】第1回保小中合同避難訓練及び講演(高知県立大学 大村誠 教授)

【9月3日(火)】小中合同防災教育検討会

【9月20日(金)】第1回防災教育参観日
小中公開授業及び講演(慶應義塾大学 大木聖子 准教授)

【10月18日(金)】第2回保小中合同避難訓練 小中合同消防訓練『簡易担架の作り方・骨折等の応急処置』(黒潮消防署)



【10月24日(木)】第2回学校評議員会
及び公開授業 取組の進捗を報告・検討

【12月6日(金)】小中合同アルファ化米炊き出し訓練



【1月28日(火)】小中合同高知県実践的防災教育推進事業研究発表会 公開授業・実践発表・講演(京都大学 矢守克也 教授)

IV 成果と今後の取組

1 成果

- 教科・領域の防災学習を通して、地震・津波への「備え」の実践や地域防災への関心等、生徒の防災意識の向上もみられた。地震が来れば「ただ逃げる」「あきらめる」という意識から前向きな意識に変わっていった。
- 『高知県安全教育プログラム』に基づいて系統的な防災学習計画を作成した。また、全教職員が一丸となって防災学習の授業づくりに取り組むことができた。



- 防災教育講演会では行政の協力もあり、多くの有識者より貴重な話を聞き、地震が起きた際には率先避難者であろうという意識の高まりをみせた。
- 保小中避難訓練を通して、「自助」はもちろんのこと、「共助」の精神も大切に取り組んでいかなければならないと感じた。
- 避難所での生活を想定した非常食の炊き出し体験では、避難所の運営に主体的に参加しようとする意欲がみられ、助ける立場の自覚が芽生えた。

2 課題と今後の取組について

- 今後、災害発生時のいざという時の判断力や行動力を養うために、映像や疑似体験を取り入れるなど、授業づくりの工夫・改善を図っていく。
- 学校だけでなく、PTAや地域、行政、関係機関との連携を緊密にしながら防災教育の実践を深めていく。
- 登下校中の避難については、生徒・保護者とも大きな不安を感じているので、学校管理外での危機管理の徹底を考えていく必要がある。
- 近隣の保小中の連携を強化するとともに、保小中の発達段階を考えた系統的な防災学習計画の作成に取り組む必要がある。